

「自分の居場所探し」としてのソーシャル・ネットワーク形成

山川 史

【要 旨】

ソーシャル・ネットワークとは、社会との関わりで個人個人がもっている人間関係網である。本研究では、日本の大学で日本語を学ぶ留学生のソーシャル・ネットワーク形成を明らかにした上で、留学生にとってのソーシャル・ネットワーク形成の意味を考察した。本研究の調査協力者は留学生4名であり、留学生活に関してそれぞれインタビューを行った。その分析の結果、いくつかの共通点が明らかになった。留学生はそれぞれ異なるソーシャル・ネットワークを形成しているものの、その中には重要なコミュニティが含まれており、それを支えているのは親密な友人関係であった。そして、どの留学生にとっても相手との時間的・空間的共有が友人関係構築の重要な影響要因の一つであることがわかった。さらに、留学生にとってソーシャル・ネットワークを形成するということは、「自分の居場所を探す」と同義であることが浮き彫りになった。

【キーワード】

ソーシャル・ネットワーク コミュニティ 留学生 友人関係構築 居場所

1. はじめに

留学生の多くは、来日後ほとんど知り合いのいない状態から、徐々に周りの人たちと接触、交流しながら、なんらかのコミュニティに所属し、友人関係を築き上げていく。これをソーシャル・ネットワークと呼ぶ(田中 2000)。留学生のソーシャル・ネットワーク形成は、彼らの言語習得や文化理解などの学習面やアイデンティティや動機などの精神面においても重要な役割を果たすと考えられている(松下 1995)。しかし、留学生にとって、異なる環境下でソーシャル・ネットワークを形成していくことは容易なことではなく、留学生は日本人学生となかなか友人になることができないと指摘する研究もある(横田 1991a, 1991b)。

実際、留学生はどのようなソーシャル・ネットワークを形成しているのだろうか。また、ソーシャル・ネットワークを形成することは留学生にとってどのような意味があるのだろうか。これらを明らかにすることは、日本語教師にとって留学生をサポートしていく上で大切であり、意義があると考ええる。また、より充実した留学プログラムを考えていく上でも重要な示唆が得られると考ええる。

2. 先行研究

留学におけるソーシャル・ネットワーク⁽¹⁾は、言語習得、文化理解、学習動機などの関連で研究されている(Fraser, 2002; Isabelli-Garcia, 2006)。Fraser (2002)では、ドイツへのアメリカ人留学生のドイツ語能力を留学前と留学後を調査した結果、教室外での活動(インターンやフットボールチームなど)に積極的に参加した留学生の方が、そうでない留

学生よりドイツ語の習得率が伸びていたと報告している。そして、教室外でソーシャル・ネットワークを持ち、活動に参加するという経験的学びが、人間的成長、文化・社会的理解にもつながっていると主張している。また、Isabelli-Garcia (2006) では、スペイン語圏へのアメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークをインタビューや学習日記などから調査した結果、言語習得や学習動機と強く結びついていることが明らかになった。そしてソーシャル・ネットワークは、ホスト側とのインターアクションの機会を拡大する役割を果たしていると報告している。また、留学生のアイデンティティもソーシャル・ネットワークと深く関わりがある。Stewart (2010) はスペイン語圏へ留学したアメリカ人留学生を対象にアイデンティティとソーシャル・ネットワークの関係を調査している。その調査結果によると、留学生は留学中、教室で学んだことだけではなく、スポーツや課外活動に参加することによりソーシャル・ネットワークを拡大し、それがアイデンティティ形成と言語の気づきに大きな影響を与えているという。

このように、コミュニティへの参加がソーシャル・ネットワークを形成する上で大変重要になってくることがわかる。実際、Dewey (2011) によると、留学生の多くは大学のクラブやチームなどの活動に参加することで、日本人学生と友人となりソーシャル・ネットワークを形成していると報告している。その調査では、日本における 204 名のアメリカ人留学生を対象に質問紙の分析を行った。その結果、一緒に過ごす時間が最も重要であり、それはソーシャル・ネットワーク形成の促進要因としてもまた抑制要因としてもはたらくことが明らかになった。

しかし、これまで留学生の多くは、ホスト側の学生との交流が少なく、同国人とのつながりが強いと指摘されてきた (Bochner, McLeod & Lin, 1977; Furnham & Alibhai, 1985)。この背景には、留学生が友人に求める機能は分化されているからだという仮説がある。Bochner, McLeod & Lin (1977) は、これを「機能モデル」と称し、機能により次の 3 つのネットワークが形成されていると報告している。第 1 のネットワークは、“mono-cultural networks” (単文化ネットワーク) と呼ばれ、同じ国から留学している者との間に形成され自文化の価値観を共有する機能を持つ。第 2 のネットワークは、“bi-cultural networks” (二文化ネットワーク) と言われ、受け入れ国の者との間に形成され勉強や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能を持つ。第 3 のネットワークは “multi-cultural networks” (多文化ネットワーク) と呼ばれ、他国からの留学生との間に形成されるものでレクリエーションの場を提供する機能を持つ。そして、これらのネットワークの中では、同国人との結びつきが一番強いとされている。しかし、同国人との結びつきをマイナスに捉えるのではなく、Bochner (1982) が主張するように、同国あるいは同じ文化圏から成るネットワークを支援しながら、よりオープンなネットワークを育て、受け入れ国の学生との関係を築くことが望ましいと考える。

この欧米で検証されてきた「機能モデル」仮説は、日本でも検証されている。横田 (1991a) の調査結果でも、仮説を支持する結果となっている。つまり、留学生同士の結びつきの方が留学生と日本人の結びつきよりも強いということである。そして、日本人学生と留学生 (91% がアジア圏出身) との親密化を阻む要因には、「言葉の障壁」や「日本の習慣」、日本人は自分の意見が希薄だという「希薄な主張」などが挙げられている。また、横田 (1991b) では、留学生と日本人学生の自己開示 (self-disclosure) パターンを調査している。留学生

9名と日本人学生21名を対象に自由記述式の質問紙を用いて行った結果、留学生は留学生に、日本人学生は日本人学生により深く自己開示しているという。しかし、留学生と日本人学生との関係は、留学生の出身地域によっても異なる。そのため、アジア圏の留学生より欧米圏の留学生の方が日本人学生との結びつきが強いと報告している研究もある(田中2000)。また、アメリカ人の短期留学生を対象に日本人との親密化について調査した村上(2005)では、留学生のソーシャル・ネットワークにおける日本人の割合は半数を占めていると言う。留学生はホストファミリーなど接触頻度の高い人と親密な関係を築いており、比較的難しいと言われてきた日本人との関係がある程度構築されていると主張している。また、留学生の友人関係は出身地だけではなく、居住形態によっても異なる。横田・田中(1992)は、237人の在日留学生を対象に、大学寮、留学生会館、アパートの3つの居住形態別に検証している。その結果、寮が日本人との交流が最も多いこと、アパート生や留学生専用宿舎生は、同国人の友人が多いことが判明した。このことから、留学生と日本人学生とを分けるのではなく、留学生と日本人学生と一緒に住む「統合主義」(江淵1991)を取り入れた居住形態が望まれることが示唆されている。

このように、留学におけるソーシャル・ネットワーク形成には、さまざまな要素が複雑に絡んでいることがわかる。これまでの研究は、質問紙調査を中心に量的に調査されてきたものが多い。そのため、彼らに何が起こっているのかという具体的な過程や内面的感情は明らかにされてこなかった。留学生一人一人が置かれた環境は異なる。また、経験に対する意味付けも個人によって異なる。実際、留学生個人はどのようなソーシャル・ネットワークを形成し、どのように友人関係を構築しているのだろうか。また、それは彼らにとってどのような意味を持っているのだろうか。これらについては明らかにされていない。したがって、留学生個人に焦点を当て、ソーシャル・ネットワーク形成について質的に調査することは意義あることだと考える。また、留学生のソーシャル・ネットワーク形成の意味づけを考察することで、受け入れ側の大学への提言ができると期待する。

3. 研究目的と用語の定義

本研究では、留学生4名を対象に彼らのソーシャル・ネットワーク形成の意味づけについて考察することを目的とする。そのために、具体的な研究課題として、①留学生はどのようなソーシャル・ネットワークを形成しているのか、②その中で最も重要なコミュニティは何か、③それはなぜ重要となり得るのか、の3点を明らかにする。これらをふまえた上で、ソーシャル・ネットワーク形成とは留学生にとってどのような意味を持っているのかを考察し、最後に留学プログラムに対する提言を行う。

本研究では、ソーシャル・ネットワークを「社会における個人と各コミュニティとの関係網」、コミュニティを「自分が所属しているグループ」と定義する。つまり、ソーシャル・ネットワークは、いくつかのコミュニティが集まり形成され则认为る。ソーシャル・ネットワークの例を図1に示す。図式は筆者が考案したものである。

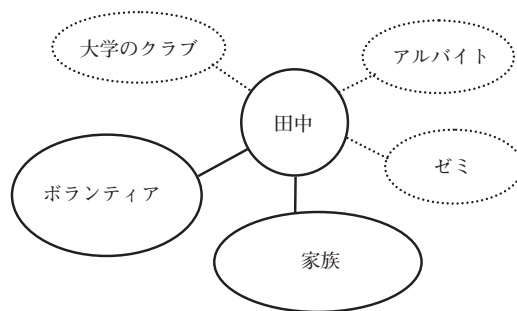


図1：ソーシャル・ネットワークの例（筆者作成）

例えば、田中という人のソーシャル・ネットワークは、「大学のクラブ」「アルバイト」「ゼミ」「家族」「ボランティア」という5つのコミュニティから成っているといえる。コミュニティの中には当事者にとって重要度の高いものがあると考えられる。実践で結ばれたコミュニティは他のコミュニティと比較し、重要度が高いものであることを示す。それ以外は点線で結びつける。図1では、「家族」と「ボランティア」が田中という人にとって重要である。なお、どれが重要なコミュニティかは、調査者が決めるものではなく、当事者が自分の持っている他のコミュニティと比較し相対的に決定するものである。そのため、測定基準があるわけではなく客観性に欠ける面もある。しかし、本研究では、留学生の持っているソーシャル・ネットワークを明らかにし、その中で最も重要なコミュニティに注目する目的で使用するため、筆者が考案した図と当事者本人に決定してもらうという方法で問題ないと判断する。

4. 調査方法

4.1. 調査協力者

調査協力者は、日本の大学で日本語を学習している留学生4名である。詳細は表1の通りである。

表1：調査協力者の詳細

名前 (仮名)	留学 形式	性別	出身 地域 ⁽²⁾	母国での 日本語学 習年数	居住場所	インタビュー時 の日本語能力 レベル	インタビュー時 の日本滞在年 数
サラ	長期留学	女	北米	1年	寮	初級	9ヶ月
リカルド	短期留学	男	欧州	1年	アパート	中級	9ヶ月
ロナルド	短期留学	男	アジア	0年	寮	初級	9ヶ月
ショーン	短期留学	男	欧州	0年	アパート	初級	9ヶ月

表1の「留学形式」で「長期留学」とは日本の大学に入学し学位取得を目的とする留学を指す。それに対して、「短期留学」とは日本語習得や文化体験などを目的とした約1年間の留学のことである。ただし、3人が実際に日本に滞在したのは約10ヶ月である。調査協

力者の日本語能力のレベルは、インタビュー時に所属していた大学の日本語クラスのレベルである。4名とも1週間に5日、日本語の授業を受講している。調査協力者と調査者の関係は、「学生と教師」であり、調査協力者には有志で参加してもらった。

4.2. データとデータ収集方法

データは、1人の調査協力者に対し1時間から1時間半行ったインタビューである。インタビューをデータとして用いた理由は、直接観察することができない調査協力者の行動や感情などの情報をできるだけ多く引き出すためである。インタビューは、2011年6月に大学の食堂で実施した。これは、調査協力者の帰国直前の来日約9ヶ月目に当たる。使用言語は、調査協力者が日本語よりも英語の方が自己表現しやすいという理由で英語を用いた。インタビューは、大きく二つの部分から構成されている。前半は、調査協力者の留学に関する全般的な情報を得るための質問部分であり、後半はソーシャル・ネットワークに関する情報を得るための質問部分である。インタビューの具体的な質問事項と手順は以下の通りである。

①目的：留学に関する全般的な情報を得る。

- ・なぜ日本に留学しに来たか。
- ・留学生活はどうか。（日本での経験、授業、住んでいる所、クラブ活動、アルバイトなど。）ただ、何をどのような順序で話すのかは調査協力者にまかせ、なるべく自然に回答を引き出せるようインタビューを進めた。

②目的：調査協力者のソーシャル・ネットワークに関する情報を得る。

- ・本研究における定義を説明した上で、調査協力者自身に自分のソーシャル・ネットワークの図を英語または日本語で書いてもらった。
- ・その中で、今一番重要なコミュニティはどれか。
- ・なぜそれが一番重要なのか。
- ・その中で、日本人学生とどのように友人関係を構築していったのか。

インタビューは、調査協力者の承諾を得て同意書に記入してもらった後、ICレコーダー（Sony, SX850）に録音した。

4.3. 分析方法

インタビュー・データは、全て文字化しスクリプトを作成した。作成したスクリプトは、Steps for Coding and Theorization（以下 SCAT）（大谷 2008, 2011）を用いて分析した。SCAT とは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967）を基に、大谷（2008, 2011）によって開発された質的データ分析手法である。大谷（2008, 2011）では、この手法は他の質的研究法と比較し、比較的小さな質的データの分析にも有効であること、また分析手続きが明確であることが特徴として挙げられている。SCAT を用いることで、インタビュー・データに潜在する意味を浮かび上がらせ、プロセスを理論化し、問題点や改善点を提示できると考える。そのため、ソーシャル・ネットワークの意味づけを行い留学プログラムに提言を行う本研究の目的に適切である判断し、この手法を用いることにした。分析手順は、次の通りである。

①文字化したスクリプトを一定の内容を持つセグメント（切片）に分ける。本研究では、

この時点で英語のスクリプトに日本語訳をつけた。

- ②徐々に抽象度を高めながら4段階のコーディングを行う。4段階のコーディングとは、
1. スクリプトの中の注目すべき語句
 2. それを言い換えるためのスクリプト以外の語句
 3. それを説明するための語句
 4. そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の生成である。
- ③最終的に浮き上がる構成概念を紡いでストーリーライン（事象の説明）を記述する。
- ④理論を構築する。

では、実際に②でどのように4段階のコーディングを行ったのか、表2に例を示す。これは、本研究のデータの一部分を分析したものである。

表2：SCATによる本研究のデータ分析部分の例

発話者	スクリプト	注目すべき語句	言い換え語句	説明語句	構成概念
調査協力者 サラ	(略 ⁽³⁾) And I like it a lot. All Japanese are very nice and I was surprised that how much English they all knew (laugh). I really really like it here. (その寮が大好きです。日本人はみんな親切だし、英語がよくわかるからびっくりしました〈笑い〉。すごく好きです。)	I like it a lot. (その寮が大好きです。) All Japanese are very nice (日本人はみんな親切だし) I really really like it here. (すごく好きです。)	寮への好感	居心地の良さ	自分の居場所

表2の通り、サラの寮に関する発言では、研究テーマと関わる注目すべき語句（文）が3箇所あった。これが、1段階目のコーディングである。次に、それらを言い換える語句として「寮への好感」を生成し、2段階目のコーディングを行った。さらに、なぜ「寮への好感」を持っているのかということを説明するための語句として「居心地の良さ」を生成し、3段階目のコーディングを行った。そして最後に4段階目のコーディングとして、1段階目のコーディングから3段階目のコーディングを踏まえた上で、データ全体の文脈を検討し、「自分の居場所」というテーマ・構成概念を生成した。

なお、コーディングの信頼性と妥当性を強化するため、調査者以外の日本人母語話者2名に協力してもらい、調査協力者4名それぞれのインタビュー・データの中の重要なコミュニティに関する部分を検証してもらった。なお、調査協力者自身に描いてもらったソーシャル・ネットワークの図は基本的にはそのままにしてある。ただし、コミュニティの名称に日本語の間違いや曖昧な部分がある場合は、その場で調査協力者に確認し、調査者が加筆・訂正を行った。ソーシャル・ネットワークの図は「3. 研究目的と用語の定義」で示したように、一番重要なコミュニティは実線で表し、そうでないコミュニティは点線で表した。

5. 結果

サラ、リカルド、ロナルド、ショーンの順に個別に記述する。まず、個々のソーシャル・ネットワークを図で示す。次に、個々のバックグラウンドを簡潔に述べた後、それぞれにとつ

て最も重要なコミュニティのみに焦点を当て記述する。そして、ストーリーラインを記述する。なお、鍵括弧はインタビューからの引用語句を、【 】は最終的にコーディングされた構成概念であることを表す。

5.1. サラのソーシャル・ネットワーク形成

サラのソーシャル・ネットワークは「寮」「クラブ」「母国の家族・友人 (facebook)」「アルバイト」「元ホストファミリー」の5つのコミュニティから成っている。図2はそれを示したものである。

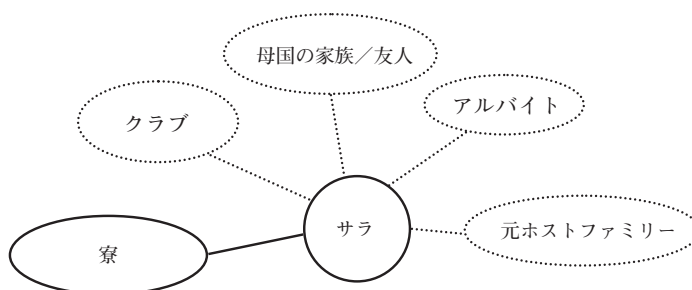


図2：サラのソーシャル・ネットワーク

サラは、高校生の時に日本に留学し、ホームステイをした経験を持つ。また、将来、日本で働きたいと考えており、そのために日本語を勉強している。大学では、寮に住み、平日は、日本語や自分の専門の授業の課題をこなすことで忙しい。アルバイトは週1回している。クラブには所属しているが、勉強が忙しく週3回ある練習のうち1回参加するかもしれないかである。そんなサラにとって最も重要なコミュニティは、寮である。その理由は、寮の人とは時間を過ごすことが多く、友人も多いからである。分析の結果、サラの重要なコミュニティに関して、【時間的共有】【所属意識】【自分の居場所】【友人関係構築における見えない壁】の4つの構成概念が生成された。ストーリーラインは次の通りである。

サラは、寮の日本人や留学生、寮での生活に好感を抱いている。それは、寮が居心地がよいと感じているからである。特に、同時期に入学した日本人と留学生とは、イベントなどを通して【時間的共有】を行い、心を開いており「ウチ⁽⁴⁾」のグループであると感じている。その【所属意識】が最終的に寮を重要なコミュニティとして【自分の居場所】と位置づけることに至っている。しかし一方で、同じ寮の中でも異なる入学時期の学生と友人になる難しさを経験しており、【友人関係構築における見えない壁】があると感じている。

5.2. リカルドのソーシャル・ネットワーク形成

リカルドのソーシャル・ネットワークは、「大阪で会った友人たち」「日本語のクラス」「居酒屋で会った人たち」「母国の家族」の4つのコミュニティから形成されている。それを示したものが図3である。

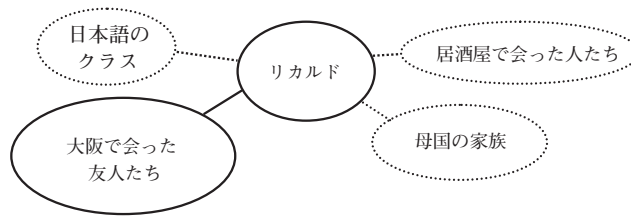


図3：リカルドのソーシャル・ネットワーク

リカルドは、寮に住むことができなかったため、つたない日本語を駆使し苦勞してアパートを探した。そのアパートに一人で住み、大学に通っている。勉強を優先させるため、クラブ活動には参加していない。そのため、大学内のソーシャル・ネットワークは大変希薄である。また、リカルドは、クラスメートとは年齢的に差があること、グループで行動するより一人で行動する方が好きだと語っていた。そんな彼にとって一番重要なコミュニティは大阪で出会った友人たちである。それは、大阪に一人旅に行った時に、偶然滞在したゲストハウスで出会った日本人や海外からの旅行者たちであった。分析の結果、リカルドの重要なコミュニティに関して、【時間的共有】【本当の自分】【居心地の良さ】【所属意識】【相手に受け入れられている感】【自分の居場所】の6つの構成概念が生成された。リカルドのストーリーラインは以下の通りである。

偶然にも旅行を通して気の合う友人との出会いがあり、【時間的共有】によりお互いを知り合うようになっていった。そして、彼らといると【本当の自分】をさらけ出しても受け止めてくれるような気がし、そのことがそのコミュニティへの【居心地の良さ】を生んだ。その結果、彼はそこに【所属意識】を持ち、彼にとって重要なコミュニティであると認識するようになった。そのコミュニティの中では、自分はありのままでも【相手に受け入れられている感】があり、そこが【自分の居場所】であると感じるようになった。

5.3. ロナルドのソーシャル・ネットワーク形成

ロナルドのソーシャル・ネットワークは、「寮」「日本語のクラス」「日本語以外のクラス」「アルバイト」「同出身国者の集まり」「旅行先で会った人」の6つのコミュニティから成っている。図4にそれを示す。

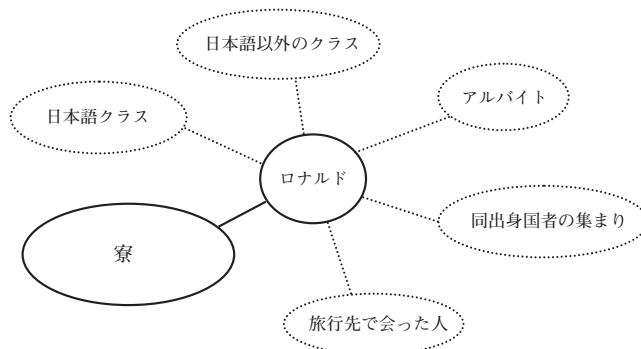


図4：ロナルドのソーシャル・ネットワーク

ロナルドは、日本の文化を体験するため、また自分の専門を深めるために日本に来た。彼は、大学の寮に住み、日本人のルームメイトと一緒に住んでいる。平日は授業の課題に追われているが、週末は、スポーツをしたりアルバイトをしたり、「同出身国者の集まり」に参加したりして過ごしている。冬休みや春休みには、「母国でもほとんど経験したことのない旅行を楽しんだ」と語っていた。ロナルドにとって一番重要なコミュニティは寮である。なぜなら寮の中でのイベントやスポーツチームに参加することにより、他の留学生や日本人と親しくなることができたからだと言っていた。特に、ルームメイトとは親密な友人関係を構築していた。分析の結果、ロナルドの重要なコミュニティに関して、【空間的共有】【相手の存在】【時間的共有】【時間的・空間的共有による友人関係】の4つの構成概念が生成された。ストーリーラインは、次の通りである。

ルームメイトとの共同生活とは、一つの部屋を相手と共に使用するため【空間的共有】が必須である。そこには、ルームメイトである【相手の存在】も大きく影響し、相手という関係を築くためには、コミュニケーションが欠かせないと感じている。また、約1年間一緒に住むという相手との【時間的共有】も友人関係に影響している。その意味で、部屋と時間と友人関係は強く結びついていると感じている。このように、ロナルドは、寮を通してルームメイトと【時間的・空間的共有による友人関係】を構築していった。

5.4. ショーンのソーシャル・ネットワーク形成

ショーンのソーシャル・ネットワークは、「クラブ活動」「家族の知り合い」「大学内の留学生」「他大学の友人」の4つのコミュニティから形成されている。図5はそれを示したものである。

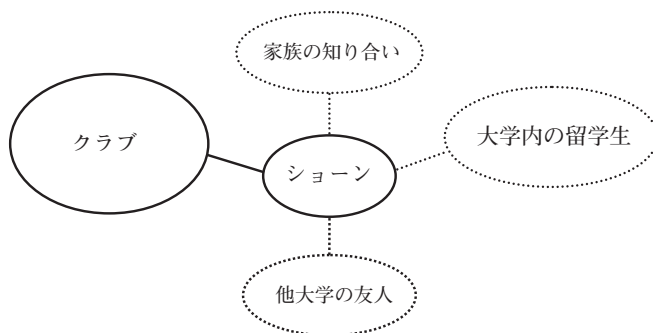


図5：ショーンのソーシャル・ネットワーク

ショーンの留学目的は、文化体験と「人間的成長」である。大学ではクラブを通して日本の文化を体験したいと考えており、クラブに参加することにした。そのクラブは練習が週3回あり、クラブ中心の生活を送っている。そのため、アルバイトはしていない。ショーンは、寮に住むことができなかったため、アパートに一人暮らしをしている。一人暮らしは、生まれて初めてであるため、苦労もあるが良い経験となっており、「人間的成長につながった」と語っていた。そんなショーンにとって最も重要なコミュニティは、大学のクラブである。その理由は、親しい友人がいるからである。ショーンは、クラブ活動を通して、

日本人学生と親しい友人関係を築き上げていた。分析の結果、彼の重要なコミュニティに関して、【活動による時間的共有】【相手からの受け入れ感】【居心地の良さ】【コミュニティへの参加】【空間的・時間的共有】の5つの構成概念が生成された。ストーリーラインは次の通りである。

ショーンは、クラブで目的を共にするメンバーと練習だけではなく、その後の食事会や飲み会を通して、【活動による時間的共有】を行うことにより、友人関係を構築していった。また、練習を一生懸命した結果、相手に認めてもらったという【相手からの受け入れ感】を持っていた。ショーンの日本語は初級レベルであるが、クラブのメンバーとは一生懸命日本語でコミュニケーションをとっている。そのため、理解できない日本語もあるが、居心地が悪くとは思ったことがなく、【居心地の良さ】を感じている。たとえば、日本語が全部理解できなくとも、クラブという【コミュニティへの参加】を試み、メンバーと【空間的・時間的共有】を行うことで、友人関係を構築していった。

5.5. まとめ

4名ともそれぞれ異なるソーシャル・ネットワークを形成しているものの、それぞれ重要なコミュニティを持っていた。分析の結果、それを支えているのは親しい友人関係であることもわかった。つまり、親密な友人関係が構築されたコミュニティは、他のコミュニティと比較し重要なコミュニティとなり得るということである。さらに、そのような友人関係構築を促進する要因としては、相手との時間的・空間的共有が重要であることも明らかになった。これは、Dewey (2011) の結果と一部一致する。Dewey (2011) でも、留学生はクラブ活動やチームに参加することでソーシャル・ネットワークを形成し、時間が最も重要な要因であると報告している。ただ、Dewey (2011) では、ソーシャル・ネットワークの細部には焦点は当てておらず、コミュニティの中の友人関係構築については明らかにされていない。そのため、「空間的共有」や「相手」については言及されていない。本研究では、それらも友人関係を築く上で重要な要因として浮かび上がった。

留学生にとって、大学内では寮やクラブなどを通してソーシャル・ネットワークが形成されやすい。しかし、入学時期などのシステムにより自分の所属以外のグループと友人関係を築き上げるのは難しい面もある。大学内で親しい友人ができず、重要なコミュニティを作ることができない場合は、大学外でコミュニティを見つけ、そこに参加し、友人関係を築いていかなければならない。留学生は、このようにいくつかのコミュニティに参加していくことで、ソーシャル・ネットワークを形成していくことがわかった。

6. 考察

6.1. 留学生にとってのソーシャル・ネットワーク形成の意味

4名の調査協力者は、それぞれ自分の所属するコミュニティを持ち、ソーシャル・ネットワークを形成していた。留学生が日本滞在中に、知り合いのいない状態からあるコミュニティに参加し、ソーシャル・ネットワークを形成していく過程というのは、まさに「自分の居場所探し」であると言えるのではないだろうか。そして、調査協力者が語った重要なコミュニティというのは、まさに「自分の居場所」であったと言える。SCATの分析に基づいた結果から、あるコミュニティが重要なコミュニティ、つまり自分の居場所になる

には、次のような過程があると考えられる。留学生は日本に来て、なんらかのコミュニティに参加する。そして、その中で相手と時間・空間を共有し、友人関係を構築する。そして、親密な友人関係が築き上げられると、相手に受け入れられたと感じ、自分はこのコミュニティの一部であるという所属感が湧いてくる。そして、ここは自分の居場所であると認識する。図6は、1つのコミュニティが自分の居場所となるまでの過程を、SCATで生成した構成概念を使用して表したものである。

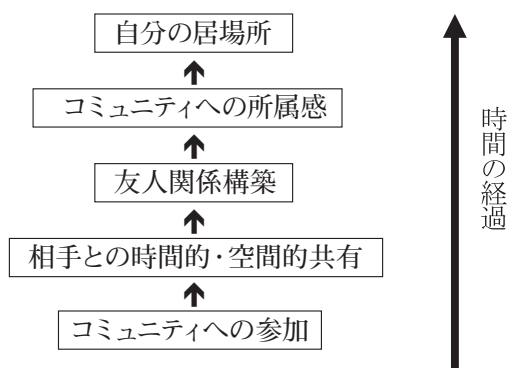


図6：1つのコミュニティが自分の居場所になるまでの過程

最初の構成概念である【コミュニティへの参加】というのは、大学の寮やクラブ活動などのなんらかのグループ、つまりコミュニティへの参加のことを意味する。コミュニティに参加することで、相手との【時間的・空間的共有】が生まれる。それは、メンバーと一緒に時間を過ごしたり、ある一定の場所を一緒に使用したりすることである。そのような影響を受けて、【友人関係構築】が行われる。そして、親密な友人関係が構築されると、相手に受け入れられたと感じ、自分はこのグループのメンバーであるという所属意識を感じるようになる。それが【コミュニティへの所属感】である。そのように感じられる場所というのは、【自分の居場所】となる。それは、居心地が良いと感じられる場所である。

しかし、参加したコミュニティの中で、相手との時間的・空間の十分な共有が行われず、親密な友人関係が構築されない場合もある。その場合は、別のコミュニティに参加し、そこで友人関係を求めることになる。このように、いくつかのコミュニティに参加することによって様々な人と出会い、ソーシャル・ネットワークを形成しながら、自分を受け入れてくれる場所を探していると考えられる。それが、自分の居場所であり、それを見つめることが、最終的には豊かな人間関係を含む充実した留学生活に繋がっていくのではないだろうか。

6.2. 留学プログラムとソーシャル・ネットワーク

分析の結果、日本の大学に所属する留学生のソーシャル・ネットワーク形成は、プラスにもマイナスにも受け入れ側大学の留学プログラムに依存している部分が大いと考えられる。本研究の調査協力者は、ソーシャル・ネットワークを形成していく上で、比較的恵まれている環境にあると言える。なぜなら、大学の寮は留学生と日本人学生の統合型をとっ

ており、年間を通してイベントも多い。クラブ活動は留学生にも日本人学生にも同じように開かれているため、自由に参加できるようなシステムになっている。また、留学生を取り巻く日本人はある程度英語ができ、コミュニケーションがとりやすかったという面も影響しているであろう。

しかし、4名の調査協力者のような恵まれた環境にない留学生もいる。日本人と一緒に寮に住みたいと思っても、大学側がそのような統合型の寮を設けていないこともある。また、クラブ活動においても日本人学生のみ参加可能で留学生に開かれていない場合もある。留学プログラムがソーシャル・ネットワーク形成に関与しているという点を考慮に入れ、受け入れ側大学として留学生に何が提供できるのか、既存のシステムを今一度見直す必要があると考える。

7. 留学プログラムへの提言と今後の課題

留学プログラムへの提言として2点挙げる。まず1点目として、受け入れ側の大学は、提供するプログラムのシステムが留学生のソーシャル・ネットワーク形成に影響を与えているということを認識すべきである。これは、現場の日本語教師はもちろん、留学生に関わる人たちが認識すべきことである。その事実を認識した上で、留学生が自分の居場所を見つけられるよう、出会いの場をできるだけ多く提供すべきではないだろうか。そのために、2点目として、受け入れ側のシステム、具体的には寮やクラブ、イベントや授業などの在り方などを見直していくべきである。日本の大学に留学したからといって、自然に日本人の友人ができるわけではない。受け入れ側の大学は、大学寮やクラブ、日本語のクラスなどを通して、留学生が日本人や他の留学生と出会う場をできるだけ多く提供する必要がある。もちろん、居場所になるかどうかは留学生個人によって差があるであろう。しかし、せめてそのきっかけとなる場を提供することは必要なことである。日本の大学の寮には、まだ留学生と日本人とが別々に住む所も多い。しかし、そのような寮だけではなく、留学生と日本人学生とが一緒に住める融合型の寮も提供し、選択できるようなシステムにすべきである。また、クラブ活動を誰に対しても分け隔てなく門戸を開くためには、留学生にとっては言語面や文化面でのサポートも必要かもしれない。さらに、日本語のクラスでは、日ごろ教室内で行っているペアワークやグループワークを巧みに利用し、日本語のクラスが留学生にとって一つのコミュニティとなるよう、お互いに自己開示できる空間を作ることも必要であろう。

今回の調査では、データがインタビューのみであったが、分析結果をより確実なものにするためには、学習日記や観察など複数のデータ源が必要であると考ええる。また、留学生側からだけではなく、彼らをとりまく日本人側からの調査も必要であろう。双方から友人関係構築を考察することにより、留学生の友人関係構築の過程がより深く理解できると考える。また、今回は、ソーシャル・ネットワーク形成の実態と意味付けにとどまったが、今後は、ソーシャル・ネットワーク形成を言語習得やアイデンティティ、学習目的などと結びつけて調査を進めていきたい。

謝辞

インタビューを快く引き受け、様々な感情を語ってくれた調査協力者に感謝します。

注

- (1) ソーシャル・ネットワークという用語は使用していないが、本研究の意味するソーシャル・ネットワークの定義とほぼ同義であると考えられる。
- (2) 本来であれば明確に出身国や母語を記すべきであるが、一部の関係者に調査協力者の個人が特定される可能性があるため「出身地域」とした。
- (3) この部分に関するスクリプトの全文は、紙面の関係上、載せることができないため一部を抜粋した。
- (4) 「ウチ」という用語はサラから自発的に出てきた言葉である。授業で敬語を学習する時にウチ・ソトの概念が導入されており、そこで学んだ言葉を使用したと考えられる。

参考文献

- Bochner, S. (1982) The social psychology of cross-cultural relations. In S. Bochner (Ed.), *Cross-cultural interaction: theory and definition of the field*. Oxford: Pergamon Press.
- Bochner, S., Mcleoad, B., & Lin, A. (1977) Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12 (4) , 277-294.
- Dewey, D. , & Ring., S. (2011) Social network development during study abroad in Japan, Presented paper at *The Association of Teachers of Japanese annual conference*. Hawaii.
- Fraser, C.C. (2002) Study abroad: An attempt to measure the gains. *German as a Foreign Language Journal*, 1, 45-65.
- Furnham, A., & Alibhai, N. (1985) The friendship networks of foreign students: a replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20, 709-722.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company.
- Isabelli-Garcia, C. (2006) Study abroad social networks, motivation and attitudes: Implications for second language acquisition In M. C. DuFon, E (Ed.), *Language learners in study abroad contexts* (pp. 231-258). Clevedon, UK: Multilingual Matters Ltd.
- Stewart, A. J. (2010) Using e-journal to assess students' language awareness and social identity during study abroad. *Foreign Language Annuals*, 43 (1) , 138-159.
- 江淵一公 (1991) 「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育』5, 4-20.
- 大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』54 (2) , 27-44.
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization：明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的分析手法」『感性工学』10 (3) , 155-160.
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』京都：ナカニシヤ出版.
- 松下達彦 (1999) 「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育」『留学交流』11 (12) , 16-19.
- 村上律子 (2005) 「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストの親密化：支援

制度による接触を中心に」サウクウェン・ファン、遠山千佳、徳永あかね、堀内みね子、村上律子、『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』千葉：神田外国語大学．

横田雅弘（1991a）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5, 81-97.

横田雅弘（1991b）「自己開示から見た留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105, 57-75.

横田雅弘・田中共子（1992）「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク：居住形態（留学生会館・寮・アパート）による比較」『学生相談研究』13（1）, 1-8.

Developing social networks as a “search for my place”

Fumi YAMAKAWA

Social networks are defined as the individual human relationships that each person has within a society. This paper examines social network development and its meaning for Japanese language students studying abroad in Japan. Four university students participated in this study, with each student being interviewed about his/her life in Japan. The results revealed a number of commonalities and also showed that despite each student having different social networks, they had an important community supported by close friendship. Spending time and sharing space with his/her friends was the most important influencing factor in order to facilitate his/her friendship development. The results indicate that developing social networks is synonymous with the idea of “searching for my place” for the students while in Japan.

